



連載

博聞意伝

世代を超えて未来を語る

48

第14回

手納美枝

〔聞き手〕

澁澤健

（アカシア・ジャパン・デルタポイント
代表取締役）

（コムنزス投信会長）

日本文学に魅せられた幼少期

澁澤 今回の「博聞意伝」には、手納美枝さんにご登場いただきました。千代田区一番町にある、アカシア・ジャパン・デルタポイントの事務所でお話をうかがっております。手納さんが『ほほづゑ』に入られたのは何年ですか。

手納 私が『ほほづゑ』の同人に加わったのは二〇〇一年の春号（第二十八号）からです。品川正治さんと小林陽太郎さんのご推薦で参加させていただきました。品川さん、小林さん、堤清二さんに私も一緒に中

国に参りましたのが二〇〇五年でしたが、『ほぼづゑ』参加はその数年前になります。その頃マレーシアで行われた日本アセアン・ビジネス・フォーラム(AJBF)で久々に参加された品川さんとお話が弾みました。『ほぼづゑ』のこともその折に参加を促されましたが、『ほぼづゑ』については創刊時(一九九四年六月)から存じ上げていました。

澁澤 それはどのような経緯でしたか。

手納 『ほぼづゑ』創刊のメンバー小倉昌男さんとお食事をご一緒した際、『ほぼづゑ』創刊号から数冊お持ち下さって、「今度こういう文芸誌を仲間と始めました」とご本を頂戴しました。若い頃から文学好きだった私は、純文学でなくとも、仕事をしながらこういう文芸誌に加わって文章を書ければ素敵だな」と羨ましく思いました。ですから、マレーシアで品川さんから「是非あなたも入ってお書きなさい」とお誘いいただいたときは天にも昇る心地でした。

澁澤 そうですか。その頃の『ほぼづゑ』と今の『ほぼづゑ』は、なにか違いはありますか。

手納 当時は、創刊人の鈴木治雄さん、住吉弘人さん、

近藤道生さん、河毛二郎さんというように大先輩界人が多くご健在でした。日本を代表する特に優れた方々であったと理解していますが、お書きになる内容が今とは少し違ったように感じます。今の『ほぼづゑ』の同人は、私を含めてですが、自分の言いたいことや書きたいことを率直に書いています。時代もあると思いますが、以前の方々はテーマやご意見にも、個人体験、意見に終わらない洞察力と思索が感じられました。表現にも、筆の走りを抑制されるような正確さと広い視野が感じられ、教養や良識が伺われる論調で格調があり、それはモデレートでよかったです。澁澤 モデレートというのは、角が立っていないということですか。

手納 そうですね、端正、余裕、ユーモアでしょうか。その点で言うと、あの頃さっそうと先頭を切っていたのは俳句のように思います。ヤマト運輸の小倉昌男さん、電通の小暮剛平さん、今も同人であられる宮部義一さん、このお三方の俳句にとっても共感しました。

「俳句を通して考える―日本の伝統―」という座談会がありました(『ほぼづゑ』第三十三号 二〇〇二年夏

号)。辻井喬（堤清二）さんの司会で、このお三方（小倉昌男、小暮剛平、宮部義二）の俳句のお話は、財界トップの共通の愉しみが座談を通じて生き生きと伝わると、同時に求道のエネルギート、達人の切れを感じさせられ、この上ないレベルでした。私は短歌長歌の万葉振りが好きで和歌を試みましたが、現代素人の和歌はどうしても説明的になってしまっているので難しいですね。その点、俳句は本当に伝えたい情景や心象を、選び抜いた言葉に託するというか、ぶつけることが出来るので、抽象絵画のような切れ味と深味を感じます。個人的には、芭蕉など昔の俳聖の俳句はあまり好みではないのですが、むしろ現代人の、ご自分の生活や心象を詠んだ俳句に驚かされます。俳句も進化しています。角川春樹さんの世界には特に惹かれます。

澁澤 先ほど、文学が好きだったと言われましたが、育った環境とか、きっかけがあったのですか。

手納 環境というほどではないのですが、父が美術建築母が書道、日本画など伝統文化を好み、周りにいろいろお手本がありましたから、その影響もあったのでしょうか。でも母は澁沢さんと同じダラス生まれです。

澁澤 アメリカ、テキサスのダラスですか。私は生まれは逗子で、小学二年から高校まで同じテキサスのヒューストンで育ちました。ライバル市ですね（笑）。

手納 母は一九二〇年生まれですが、母の父、私の祖父が米国三井物産のダラス支店長で、東洋綿花前身の現地法人で綿花事業に携わっておりました。母が八歳の頃家族で日本に帰国しましたが、滞米生活二十年以上の祖父は、帰国後日本の歴史や地理、伝統文化や武芸を熱心に子供たちに教えたようです。祖母は女学校を出て十八歳で祖父と結婚、すぐ渡米していますので、現地で家庭教師から英語、手芸、ピアノなどフィニッシュスクールのような教育を受けたようです。

澁澤 とてもインターナショナルなお家ですね。ただ、海外で生活されていると母国日本に対する理解はいかがだったのでしょうか。

手納 こどもは親と一緒にですからそれは仕方ないことでしょうね。当時の在外企業人たちはその点に関し大きな覚悟を持っていたのではないのでしょうか。当時三井物産では、家族や使用人等揃って日本に帰省するホームリープが二年ごとにあり、母も子供ながら太平

洋を四往復しております。ダラスから西海岸のシアトルまで鉄道で移動、シアトルから日本郵船の船で横浜まで。日本橋生まれの祖母が、帰国ごとにまず東京で鰻を頂くのを楽しみにしていたとか、ホームリブが終わって横浜から出航するときは祖母の姉妹たちが港の見える丘公園のあたりで、ずっと見送っていたとか、幼いころの母の記憶ですが、大正年間の絵のような情景でしたでしょうね。

澁澤 お母さんが育ったそういう環境の影響を受けられたからか、手納さんは日本の伝統的なものへの強い関心とともに、欧米の教育を受け、お仕事も国際的な経験を積まれていますね。

手納 そうですね、祖父は第一次大戦前後、何度か欧州を訪ねており、当時の文化芸芸の中心、ローマ、ベニス、ライプチヒなどでたくさん美術の本を購入しています。そういった図書や絵画が、帰国後、夙川の家にも多くありました。ですから、私が学校にあがる前からラファエロ、ティチアーノなどのルネサンス美術の作品集が周辺にあり楽しんで見えていました。イタリア、フランス語の本でした。百年以上前のドイツ語

のカラー印刷の作品集などもありました。

澁澤 手納さんはどういうお子さんだったのですか。

手納 ぐり勉^{ぐりけん}でしたかしら。新しいことを習う勉強が好きでしたし、気に入った文章を憶えることが好きで、百人一首は小学生、平家物語の一、二段などは中学初めに誦^{まよ}んじていました。私は聖心女子学院ですが、初等科終了後、上級科教室のクローゼットを開けると、古典文学の本があり、それは高等科や専攻科生のためのものでしたが、吉川英治の『新・平家物語』、谷崎潤一郎の『源氏物語』など文学書もずらっとあり、読んでも良いとお許しをいただき夢中になって読みました。当時未完の『新・平家物語』完結後は『三國志』、『宮本武蔵』など、吉川英治の世界にすっかり魅せられていましたね。吉川英治の文章世界はどれも重厚情緒的な大作であり、今ではとても読み切れませんが、良い時期に読んだと思います。序文とか跋文を見直している、七五調の韻を踏んだ文章で語調が良く、つい口ずさみ覚えてしまいます。私の謡曲や能への関心はここからでしょうか。こうした、日本の歴史・伝統に根差した文章・言葉は、調べが美しく私は好きです。

澁澤 今の子どもたちは、テレビはあるし、インターネットはあるし、情報源として本を読む機会が少なくなってしまうですね。オンデマンドで必要な情報を容易に引き出すことに慣れてしまうので。

手納 今出版界をみると、ありとあらゆるものが出版されているようですが、子どもたちが自身で本を選ぶという訳にはゆかず、大人が選んであげるといふことが必要でしょうね。それを考えると、子供が親の本棚から勝手に本を抜き出して読むことの幸せを感じます。教えられずにおのずから興味を感じて知識を得るといふことでしょうか。読んでゆくうちに分からないことが出てくると、少し背伸びをして調べてみるとか、そうやって大人の知識を自分のものにしてゆくことが理想のように思われます。

アメリカへの留学、国際舞台へ

澁澤 そうして、聖心女子大学に進まれて、卒業後はアメリカの北アイオワ大学に留学されましたね。

手納 そうです。まだ一ドル＝三百六十円の時代ですから、自費留学は困難で、スカラシップをいただく必

要がありました。

澁澤 留学したいという思いは、何歳くらいからおありでしたか。

手納 もともとは母の希望でした。母は自分がアメリカで生まれ育つたことから記憶に残る幼少期のアメリカへの郷愁を、娘にも共有して欲しかったのだろうと思います。「日本の大学卒業後は娘たちにはアメリカで勉強して欲しい」というのが母の考えでした。英語だけは確りと身に着けるようにと、最初の英語のレッスンは母からでした。聖心では初等科一年、六、七歳の頃から英国やアイルランドからのシスターたちによる英語科目が週五、六時限ありました。あの頃（一九五二年頃）は全生徒に行き渡る英語の教科書がありませんでしたので、学校からお預かりするお手本を見て親が作ってくれましたが、絵心のある母は素晴らしい絵本仕様の教科書を作ってくれました。母が水彩できれいな絵を描いて、文字は父が花文字で書き、それを予習復習で読まされるのです。まだ子供で、「L」と「R」の発音を間違えますと、母から厳しく注意されました。

澁澤 手納さんの英語は、アメリカ英語というよりもきれいなイギリス英語、という印象がありますが。手納 もともと聖心女子大学での英語は、英文学であり、古典劇、詩文朗読で、イギリス英語です。キングスイングリッシュの格調と滑らかな抑揚にはいつも憧れていました。それがアメリカでは無い。MAを求めた大学院にも、就職した国際連合にも、ATカーニーにも無い。ただアメリカの英語は非常に明確で解りやすく、口調が優しいので、ビジネスや生活に向きます。イギリスの英語は歴史や科学、人間の生き方に関連するよう感じます。語彙も段違いに多い。



手納 美枝氏

私が仕事で英語を多く使ったのは、年数からみてイギリスにおいてですが、元来は米国顧客が主で、企業へのコンサルティングや調査、リポートはすべて英語でした。いろいろありましたが、例えばここにミリケン・カンパニー（米国サウスカロライナの繊維会社、当時米国最古最大の同族企業）の日本研究ミッションの折の写真があります。ソニーの盛田昭夫会長とご一緒です。一九八〇―一九〇年代はアメリカや欧州企業による日本企業の品質管理研究が盛んになり、私はアメリカのパートナーと共に日本の高品質企業における研修プログラムを作成、実地の指導に当たっておりました。ミリケン社も熱心でしたが、ボーイング、ウエアハウザー、USウェスト、スミスクライン・ビーチャム、アメリカンエレクトロニックパワーなど熱心で、日本企業と同じく、トップを頂点として全社一丸で、品質向上をめざしました。私どもはトップが変革しなければ会社は変革できないとの考えで、トップの為の研修です。富士ゼロックスの小林陽太郎さんはじめ、ソニー盛田さん、トヨタ、デンソー、NEC、リコー、日立など、多くの素晴らしい日本企業経営者にご指導いた

だきました。

澁澤 北アイオワ大学のお話に戻りますが、アイオワ州の所在地はどちらでしたか。

手納 シーダーフォールズという小さな大学町です。シカゴの西五百キロ、ミネアポリスの南約三五〇キロといった地点です。見渡す限りトウモロコシ畑しかない平地です。(笑)

澁澤 聖心女子大学を出られて、東京からいきなりアイオワの田舎の街に放り込まれたようなものですね。ともあれ、手納さんが一番初めに見られたアメリカですよね。

手納 母たちの頃は日本郵船の船便で行き来していたと聞いていましたので、アメリカに行く折には船で行きたいと思っていました。大叔父と懇意であったAPL(アメリカン・プレジデント・ライン)の役員のお世話で横浜からホノルル経由のウイルソン号に乗り、到着港サンフランシスコでは、ご夫妻で港に迎えて下さり、パークレイのお宅に滞在しました。薄緑に煙るような樹木の多い大きなお家で夢のように美しく、初めて見るアメリカの高級住宅地の規模と美しさに驚きま

した。

澁澤 それで、汽車でアイオワに行ったら、景色が全く違ったのではないですか。

手納 汽車でなく、グレイハウンド・バスです。アイオワは畑以外全く何もないところで、大学のキャンパス(鐘楼塔)や寄宿舎以外三、四階以上の建物がなく即地平線なのに驚きました。でも、留学生も多く、寄宿舎での学生生活ですぐ慣れましたね。

澁澤 北アイオワ大学は四年間ですか。

手納 私は大学でなく、大学院一年間のスカラシップ(奨学金)をいただきました。学位を取るのが目的でしたから、延長等に関し相談しまして、二期、一夏期の一年間の単位に加えて論文で、一年半で修士号を取得しました。その間、祖父の記憶の残るダラス・ロータリークラブからお招きいただいてスピーチをしたり、ニューヨークにも何度か参りました。ワシントンも素敵でしたが、ニューヨークが好きになりました。卒業後はここで仕事の経験をしたと思います。ニューヨークでお世話になったアメリカ企業の方たちにも相談しましたが、チェース・マンハッタン銀行の

役員が「現在のアメリカでも、ニューヨークでさえも、女性が大学や大学院を出ても、採用される仕事は、秘書だけだ。残念ながらわが国でもこれが現実です」とはつきり言って下さった。それならば、どこでどのような仕事をしたいか自分で決めようと、以前から関心のあったUN（国際連合本部）を訪ねて人事部と相談し、改めて試験を受けて広報部に配属されました。アイオワから何回もNYに出向くのが大変でした。UNにはどのくらいおられましたか。

手納 四年強です。UNにはアメリカ人は少なかったのですが、各国からの良い友人がたくさんできました。その間に大阪でのエキスポ（大阪万博 一九七〇年）がありましたので、国連本部から派遣され半年間国際連合館で働きました。宿舎は千里の大きな団地でしたが、若い人たちが多く賑やかで、ニューヨーク以上ここは国際的なところでした。

澁澤 当時、国連で働いている日本人は多くおられたのですか。

手納 明石康さんをトップに数人で少なかったと思います。明石さんは事務総長室のある三十八階におられ

ました。当時国連で働いていらした方々は、国からの派遣枠でなく個人で応募された場合が多かったようです。私もまったくの個人で、日本代表部とも正式なご縁はありませんでしたが親切にしてくださいました。外務省の赤谷源一大使のご兄弟、赤谷環さんがエカフェ（バンコク）から本部に戻られ、スカースデールのご自宅でご家族には大変お世話になりました。こうした四年間の国連体験の後、両親の要望もあり帰国しました。

帰国後、何が出来るだろうかと考えていた折に、北野建設の友人が「これからはコンサルティング分野にお入りなさい」とアドバイスを下さったのです。「あなたはアメリカから帰国したばかりだし、海外には日本に投資をしたいと思っている国や企業が沢山あります。その点まだ日本の企業や産業の情報が先方には少なく、それを仲介するコンサルティングが今後必要になります」といわれました。それで私は、まずマッキンゼーの面接を受けたのですがMBAでないため歓迎されず、住友ビジネスコンサルティング（現日本総合研究所）で銀行員然としたビジネスマンの波に交じっ

て中途採用試験を受けました。それで合格者二名の中に入ったのは良いのですが、「あなたは国際機関で高給を取っておられたので、残念ですがうちでは雇えません。その代り我が社が今度提携する米国有数のコンサルタント会社で働いていただきたいので、ぜひそちらに行ってください」ということになり、A・T・カーニー日本支社での第一号社員となりました。同時に住友ビジネスコンサルティングとのご縁も始まりました。

澁澤 そうですか。日本における経営コンサルタンの草分けのような存在ですね。

手納 数年後私はカーニーの日本支社マネージャー、プリンシパル、そして後ヴァイスプレジデントとなりましたが、全世界のカーニーの中で初めての女性VPでした。

澁澤 イギリスでのお仕事も、カーニーの一連の業務の繋がりでされたということですか。

手納 そうですね。カーニーは伝統的に製造業に強く、政府公共関係は私が担当していましたので、イギリスのプロジェクトとして、地方開発公社と連携して日本

企業の海外投資促進、工場誘致の仕事を行いました。ただ、カーニーの他の仕事に相当時間を取られていたので、顧客からはもっと時間を取ってほしいと要請されていました。たまたま当時カーニーの日本方針が明確でなく、私も身体をいためるほどの仕事量であったこと、英国への企業誘致としては、日立マクセルとリコーの二大工場プロジェクトが完結しましたので、少し仕事を離れたらいいと思い、十四年間勤めたカーニーを退職しました。

澁澤 それまでのお仕事は、アメリカ人およびアメリカ企業文化と日本との接点を結ぶようなお仕事ですが、今度は、イギリスの企業文化、イギリス人気質と接せられたのですが、双方違いはありましたか。

手納 違いましたね。イギリスの仕事が始める時、最初はすこし緊張しました。文学や歴史知識の接点しかなく、現代英国人がアメリカ人に比べどのような考え、反応をするのか見当がつきませんでしたから。けれども仕事を一緒にするうちに、非常に健全で実質的な考え方と行動をする人たちであるということが分かってきました。一般的イギリス人、中上流の人々な

ど実際仕事に関わっている人たちに質問し、観察して私なりにいろいろ理解できました。イギリスには社会階層がありますが、貧富・格差を意識するより、価値観・スタイルの違いと意識されるようで、興味深いのは、アメリカ人や日本人のように、成功して出世したいという考えを、英国人大多数が持っている訳ではないということです。もともと自分自身の家庭や領域の中で、自分と家族、犬や猫、あるいは馬などを大切に守り、自然や農作業を実に大事にする人たちであるということですね。その中で興味深いのは子供の躰け方です。伝統的に英国人は子供と犬の躰け方は同じとされます。両方とも、動き回ったり、声や音を出してうるさくしてはいけないということで、十二歳までは、親や大人から許可をもらわれない限り自分から声を出したり、余計な質問をしたり、客人に話しかけてはいけません。ですから大人の中では非常に静かです。日本では大声を出したり泣きわめく子供を見ますが、英国では皆無、大人の世界です。もちろん犬も静かです。守るべきは大人の生活スタイル、邪魔をされない静けさ、同時に厳しい躰けを通して、子供は大人になったらこ

うなりたい、あれをしたいと夢を描きます。今は少し変化があるかもしれませんが……。

澁澤 アメリカン・ドリームということでしょうけれども、イギリスのジョンブル魂というのは全く違うということでしょうね。

手納 そうですね。貴族階級においても同様のようで、自らが良いと思う好きなことを継続する。例えばプリンス・チャールズにしても有機農業をご自分のビジネスとしておられますね。野生の動植物への関心も深く、落ちていたこの羽根はこういう野鳥の種であるとか、雑草のような植物にも、英語、ラテン語の名称があるとか私も習いました。昔からの博物学そのものを実践するような、自然や環境を大切に国民性がありますね。

澁澤 イギリスも日本も同様に島国であり、日本人は自らを「島国云々」と冠かんむりをつけますが、イギリス人も「島国だから」という意識がありますか。

手納 イギリス人は自分たちをヨーロッパ人とは思っていないくて、「イギリスとヨーロッパ」という並列的な考え方ですね。同格どころか、ヨーロッパは陸続き

で狭いところで窮屈にせめぎ合って戦争ばかりしているが、イギリスは周囲が海だから、幾らでも外に出て行ける建設的な自由がある。だから自分たちの方がずーっとレベルが高く優位にあるという考え方です。

日本も同じように周囲は海に囲まれています。十七世紀以降は鎖国令により大きい船の建造を禁止外に出てはいけなうとしましたが、イギリスは逆に海洋から世界中を制覇しようとしてましたね。だから周囲同じ海に接していても日英の意識は根本的に違います。その意味で、日本人の島国意識は徳川鎖国三五〇年によるものであろうと思います。

コンサルテイング会社を設立

澁澤 さて、先ほどA・T・カーニーから独立されたというお話がありました。 「アカシアジャパン・デルタポイント」という現在の会社を立ち上げられるのですが、その経緯はどのようなことだったのですか。手納 一九七〇年代半ば野村証券がアメリカの株式を初めて日本で売り出したことがあり、それに関連して、それらアメリカの大企業を日本の市場、株主に紹介す

るTVプログラムを作る仕事のプロジェクトを打診されました。それは私がカーニーに入ったばかりの頃で、私は支社長に「電通からこういうことを言ってきた。コンサルテイングとは少し違います。私はやりたいと思います」と相談したところ、「ウエハウザー、ボーイング、コカコーラ、ペプシコーラ、インターナショナル・ハーベスター、……これら企業は皆うちのクライアアント（顧客）だ。その上に各社トップにインタービューできるのはカーニーの新人としては願ってもない機会だからぜひやりなさい」ということになり、断続的に二年間程リポーターとしてこのプロジェクトに関わりました。シカゴではプレイボーイ社のヒュー・ハフナー社長・編集長をプログラムに加え、シアトルでは、ボーイング社で、建造中のJALジャンボジェット第一機747「橋」を見学、ウエハウザー社（北米最大の木材製紙会社）では、最良の木材組織をセルロースから培養し、効率的に育成するバイオそのものの木材促成生育システムを説明されました。その後ウエアハウザーの日本支社勤務の夫とお見合いの席で話が弾んだのですが、結婚後も、夫はウエハ

ウザーの仕事があり、私は私でカーニーの仕事がありました。

当時ウエアハウザーの紙製品に対して日本国内顧客から品質の不均一や寸法の丈足らずなどのクレームが頻発したことがあり、それらをどのようにして克服してゆくかということを指導したのが、シアトル、ベルビュー（マイクロソフト本社所在地）のデルタポイントというコンサルティング会社でした。カーニー在籍の私もそのチームからいろいろ学び、意気投合して、将来いろいろなことを一緒にやりたいということになりました。すでに、大手企業へのクオリティ研修の仕事も多々で、その一環として、日本の品質管理、品質要求の研修のために、先ほどお話しした、ミリケン・カンパニー、ボーイング社のように、企業のトップ何十人という勉強会を何度も組んで日本企業の品質研修を行いました。カーニー退職後、私はこの事業とともに、開発公社からの要請により日立マクセル、リコーに続く日本企業の工場誘致を再開し、NEC、エプソン、マキタ、デンソーなどの工場をイギリス中部の地方都市テルフォードに誘致、工場設立のサポートをいたし

ましたが、課題は、稼働後に日本の親工場の品質管理のクオリティの高さに、どうやって到達できるかということでした。これはデルタポイントの欧米企業への日本レベル品質追求そのものであり、そのために現地での人材育成なども含め、誘致後の進出企業のアフターケアの要望もあって、課題に挑戦したわけです。

澁澤 自立し、デルタポイント・インターナショナルを設立（一九八六年）されたのですが、当時の日本にはまだまだ、女性は結婚したら家庭に入るべし、という観念が強かったのではないですか。

手納 そうですね。ただ、結婚する前からの仕事の継続なのですが。夫は自分の仕事があり、私も自分の仕事に全力投球でした。だから家の中に独立した人間が二人いるということですね（笑）。

澁澤 今、社会における女性の活躍が言われていますが、このことについてお考えはありますか。

手納 女性は大いに活躍すべきと思います。逼迫する人的資源として、また企業、市場に不可欠な女性の視点、質的能力の面からも、女性が男性と同等に働かなければ先進国の社会は成り立たないでしょう。また途

上国、新興国での女性活躍は必要かつ必然であり、大きなインパクトを継続するものと心強く思います。十年前の私の経験に比べ、今や業種、職種、ポジション、環境も追い風で、働く女性にとつては「ジェンダーカード」さえ効く恵まれた時代になったのですから、大いに活用し貢献しなければならぬと思います。また、女性活躍の裏には必ず優れた男性が存在します。日本の男性は、自分に関係のない女性の地位や活躍は認めるのですが、妻や身近な女性を社会に出して認めさせることにまだ慣れていません。優れた女性を正當に評価できる前向きの男性を育成しなければなりません。女性が、男性を育てるのは母親ですから、母親自体、長期的に優れた見解を持つ必要があります。瀧澤 手納さんのこれまでの来し方を興味深く伺ってききましたが、お話の締めとして、ご自身の信条の中から次世代へのアドバイスなり、メッセージを發していただきたいと思います。

手納 仕事でもプライベートでも、私は興味のあるものには手を挙げて、プロセスを楽しみ、多くの成果を出してきましたが、出来なかつたことも一杯あります。

出来ることのみで手一杯だったのが実情ですが、努力の必要な分野は避けてきたのか、運動関係は得手ではなくあまり機会がありませんでしたし、他分野の自分の可能性をあまり掘り起こしていないと自覚しております。これは行動や視野が限定されることで、今考えると非常に残念です。先日もパラリンピアンの方の決死の努力、目標、過酷なりハビリと競技訓練を知り、自身に少しでも与えられた可能性があるならば、それは祝福として取り組んでみるべきだと思います。それは待たずに、出来るだけ早い時期に始めるのが良い。それは特別に意識することでなく、ただ継続するだけでも向上し、より広い視野を育み、結果として何十倍もの建設的な成果が得られるのだらうと思います。瀧澤 〆継続は成果に導く〆、いい言葉だと思います。ありがとうございます。

(てのうみえ／しづさわけん)

(二〇一五年九月十五日収録)